



その1

在原業平

—ありわらのなりひら—

(平成20年1月1日号—第252号)



私たちのまち枚方には、古くからさまざまな人が住み、あるいは通り過ぎて行きました。このコラムでは、こうした枚方ゆかりの人物を紹介していきます。

最初に取り上げる在原業平は、平安時代初期の歌人で、『伊勢物語』の主人公と考えられています。阿保[あぼ]親王の子で平城[へいぜい]天皇の孫に当たりますが、当時、権勢を誇っていた藤原氏と縁戚関係がなかったため、政治的には不遇でした。

同様の境遇にあった惟喬[これたか]親王との交友は『伊勢物語』にも描かれています。それによると、親王の別荘渚院[なぎさのいん]にやってきた一行は、桜の下で宴を開き、和歌を詠みました。このときに業平が詠んだ「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌は『古今和歌集』にも収録され、桜の花を賛美した名歌として親しまれてきました。渚院を後にした親王の一行は天の川のほとりに至り、またも宴を開きました。親王が「交野で狩りをして、天の川のほとりに至ったことを題材に歌を詠め」と命じると、業平は「狩り暮らし棚機つ女[たなばたつめ]に宿からむ天の川原[かわら]に我は来にけり」と詠みました。現実の天の川を天上の天の川になぞらえた業平の機知に意表をつかれたのか、親王はこの歌を繰り返し暗誦するばかりで、返し歌もできないほどでした。

惟喬親王と業平の交遊の場となった渚院の跡には、後に観音寺が建てられましたが、明治3年に廃寺となりました。現在は旧観音寺の鐘楼と梵鐘が残るのみで、両者とも市の有形文化財に指定されています。



渚院跡に建てられた歌碑(渚元町)